

認知意味論による翻訳の訳語選択とその指導法—as の事例研究—

河原清志

立教大学異文化コミュニケーション研究科

Abstract

There are many reference books that explain how to translate on the professional level. In reality, however, such resources only compile their methodologies in manual form. While this may be directly beneficial to those in professional translation settings, such resources do not systematize their methodologies based on disciplines or theories, and therefore do not provide explicit learning strategies of the translation processes. This paper attempts to shed light on this area by focusing on English-to-Japanese translation at the word-level. It analyzes an underlying mechanism behind the process of selecting translation equivalents (i.e. Japanese expressions) within the theoretical framework of cognitive semantics, and suggests how to teach and learn translation strategies. In order to show concrete examples of the cognitive processes of word-level translation, this paper analyzes the polysemous word “as”, since it has several different varieties of potential translation equivalents in Japanese.

1. はじめに

一般に、翻訳において原文と比較しながら訳文の産出結果を眺めてみると、なぜこのような訳文になるのか、なぜこのような訳語を選択したのかがわからないことがある。また、産出結果には納得がいくが、どのように学習・訓練をすればそのような訳出ができるようになるのかについては、体系的な翻訳教授法・訓練法が確立していないのが現状である。

確かに、安西 (1994: 8) の言葉を借りれば、「翻訳という作業には実におびただしい、しかも多面的な事柄が関係して」いるし、「まず原文を十分に読み解くためには、語学力そのものの力はもちろん、その背後にある風俗・習慣、文化的・社会的背景、あるいは作者や作品についてそれなりの理解が不可欠」であり、一筋縄ではなかなか学習・指導の原理が見つかるものではない。さりとて、英語学習における文法訳読方式に基づいた英文和訳の訳文産出のレベルと、翻訳における訳文産出のレベルとは明らかに違いがあり、その違いとは一体何か、なぜ違いが出るのか、違いがあるとして両者には連続性があるのか、どのようにその違いを克服したら質の高い翻訳実務が可能になるのかといった疑問も湧いてくる。そこには、辞書的な語義の当てはめだけではとても解決できないもっと複雑なプロセスが関与しているのではないか、と思われる。この疑問を解明する手始めとして、翻訳研究の様々な局面のうち、語という極小単位に着目し、特に語義選択が難しい多義語を取り

上げて、その訳語選択のプロセスを考えてみたい。その一つの試みとして、本稿では as を取り上げて、英語から日本語への訳語選択の認知プロセスの解明とその教育的応用方法を論じることとする（通訳の事例研究として、鶴田・佐藤・河原 2004 がある）。

2. 問題状況

熟練した翻訳者は実務の際に as を英和辞典で引いて意味を確認することはまずないだろうが、訳語に迷った場合には参考程度に語義を確認することはあるかもしれない。as を英和辞典で引くと、接続詞の項だけ見ても「...と同様に；...のように；...している時に；...だから；...だけれども；...のような；...として」など、実に多くの語義が載っている。そして、「...だから」と「...だけれども」のような一見正反対の語義が並列的に並んでいることに改めて気づく。しかし、果たしてかような雑然としたリストから as の意味の全体像が把握でき、リストされた数ある語義の中からの的確な訳語が本当に選べるのだろうか。あるいは、翻訳をする際、我々は本当に辞書に記載されている語義から訳語を選択しているのだろうか。次の事例を見てみよう。

(1) a. It was something he'd have to sort out with the American: things were going to be difficult enough as it was, without constant game playing between them.

b. [訳例] アメリカ側とはきちんと話をつけねばなるまい。事態はただでさえ難しくなっている。おたがいの間でこんな児戯をつづけている暇はないのだ。(出典：フリーマントル[著]、稲葉明雄[訳]『暗殺者を愛した女』p.99 新潮社 1989 年) (下線は筆者による。以下、同じ。)

(2) a. Out of the tail of his eye, he could see the dab of cotton-wool on his cheek wagging absurdly as he spoke.

b. [訳例] 喋るはずみに、頬につけた脱脂綿の塊が滑稽にゆらゆらするのが視野の隅に映っている。(出典：ドロシー・L・セイヤーズ[著]、浅羽英子[訳]『殺人は広告する』p.196 創元推理文庫 1997 年)

(1.a)で as it was という表現があり、この表現を求めて英和辞典を引くと、接続詞の項に as it is という見出しに続けて次のような記載がある。

(3) a. (1)[文頭・文尾で] (だが) 実情は (そうでないので)、実際のところは (せいぜい) [ただ]...である《◆通例前述の仮想と対照して用い、前に but を置くこともある；後続文には、しばしば前文より限定された内容がくる》(2)[文中で]現状は、実際問題として (3)[文尾・目的語の後で]そのままにして、そのままの (出典：『ジーニアス英和辞典』)

b. つなぎ語[文頭または文中に置いて] (しかし) 実際は、実のところは / (1)そのままにして (も)；そのままの(2)そのままでも、(今でも) すでに (出典：『ルミナス英和辞典』)

当然のことながら、「ただでさえ」という訳語は(3)だけでなく他の辞書にも載っていない。(3.a-b)にあるように、「実のところは、実際には」という訳語を当てるともっともらしくもなるが、これらの辞書の記載では、(3.b)にもあるようにつなぎ語、つまり、接続語句とし

て前後の内容を逆接的に接続して、想像とは違う事実内容を焦点化して陳述する意味機能を担うものとして読み取れてしまう。ところが、(1)の事例はかような接続語句としての意味機能を担わせたものではない。恐らく、(3.a)「現状は、実際問題として」とか、(3.b)「そのままでも、(今でも)すでに」に該当すると当たりをつけられるが、「ただでさえ」などのような辞書にはない訳語をどのように考えたら選択できるのか、原理的にはわからない。いずれにしても、翻訳者は翻訳の際に単に辞書に記載された訳語リストから選択して訳語を決定しているのではないことがわかる。

また、(2)の事例は、as を「...するはずみに」と訳出したものである。どの英和辞典を見ても「...するはずみに」という語義を記載したものは見当たらない。英和辞典が通常行っている語義の上位分類として、as は「時；比例；様態；理由；比較；譲歩；直前の名詞を限定」が接続詞の項に挙がっている。このうち(2)の事例では、as は「時」に当たるとさしあたり判断される。では、なぜ「時」を表す「...する時に；する間；しながら」という訳語が当てられていないのだろうか。そして、どのように処理すれば「...するはずみに」という訳語が選択できるのだろうか。いずれにしても、事例(2)においても、翻訳者は翻訳の際に単に辞書に記載された訳語リストから選択して訳語を決定しているのではないことがわかる。

ここで、語彙レベルの訳出について考える際には、①英語 (Source Language、以下、S L) における語の意味と、②日本語 (Target Language、以下、TL) における訳語の問題を峻別して議論する必要がある。前者については語の意味構造について理論的解明を目指す一方、後者については訳語の選択に関する日本語としての語用論的、文脈調整的な実践的手法として整備していく方向が望ましい。したがって、両者の問題を峻別した上で、訳語決定の問題を単なる経験則の集積とは異なった理論的背景を伴ったものとして体系化していくことが必要だろう (鶴田・佐藤・河原 2004)。

このような見地に立って、本稿では分析の便宜上、上記①②を分けて論ずることとし、本稿は紙面の制約上、訳語決定の問題全体のうち、S L の語彙の意味の問題として①の局面のみに限定して、意味論の立場から意味分析をしつつ議論を進める。

では、議論を緻密にするためにここで以下のように操作定義を行うこととする (田中 1990, 田中・佐藤・阿部 2006 を参照しつつ、翻訳理論を扱う上でアレンジした)。

- ・ コア(core meaning)：中核的語義(de-contextual meaning of a word)
- ・ 意味タイプ(clustered meaning)：文脈横断的語義(trans-contextual meaning)
- ・ 語義(meaning)：辞書的な意味(meaning listed in a dictionary)
- ・ 意味合い(sense)：文脈中で意味づけられた意味(context-sensitive meaning)
- ・ 訳語(translation equivalent)：目標言語に置き換えた時の語(translated word in TL)

これらの具体的説明は後述するとして、この操作定義に照らして事例(1)と(2)を改めて見てみると、(1)は意味タイプとして「態様」を表す as で、T L として as it was 全体で「ただでさえ」という訳語が選択されたものである。また(2)は従来の英和辞典の意味タイプにいう「時」に当たり、辞書に掲載されている「...する時に；する間；しながら」という語義をそのまま T L の訳語として選択せず、英和辞典の語義から離れて日本語の文脈の中で

「...するはずみに」に決定したものである。いずれにしても、翻訳者はどのように訳語を決定しているのであろうか。

3. as の翻訳と指導例の実例

ではここで、翻訳者による as の訳出例と、訳出に至る内的プロセスを探るべく指導例の実例を見てみよう。紙面の制約もあることから、本稿は as が接続詞・関係詞として文中に出現する事例で、しかも「態様」を意味するものに限定する。ではまず、安西（1982）を引用する。

(4) a. Try and see things as they are.

b. [訳例] 物事を、ありのままの姿で（ありのままに）見るようにしなさい。

(5) a. Why do you have to bother me with a thing like that when I am busy enough as it is?

b. [訳例] うるさいなあ、どうしてそんな話を今もち出さなくちゃいけないんだ。そうでなくても忙しいのに。

(6) a. There is a legend, quite without foundation, that I am fond of finding fault with society as it is, without having anything better to suggest in its place.

b. [訳例] 世の中には私に関して、まったく事実無根の伝説が流布しているらしい。つまり私は、社会の現状にたいしてアラ探しばかり好んですが、そのくせ、ではその代わりにどうすればいいというのか、代案の持ち合わせは全然ないというのである。

(7) a. She realized in a sudden that to him she was just the same as she had ever been. He had loved her always as she was.

b. [訳例] 彼女は突然さとした。この人の目には、私の姿は昔も今も、少しも変わってはいないのだ。いつも、あるがままの私を愛しつづけてくれていたのだ。

これら(4-7)に関して安西は、

いわゆる「態様」を表すasも、ただ機械的に「...のように」では片付かないケースが多い。

と記しているだけで、なんらasの訳出に関する準則を提示していない。

では、次は片岡・金（1989）を見てみよう。

(8) a. "Will you have a whisky, Doctor?" "No, thank you. I have still two more visits to make and I'm late for dinner as it is."

b. [訳例] 「ウイスキーでも一杯いかがです、先生」「いや、結構。まだ往診がふたつあるし、そうでなくても夕食に遅れていますから」

c. [解説] 「態様」を表すasの練習である。ただ「...のように」と訳したのでは片付かないケースが出てくる。たとえば、We hoped things would go better, but as it is they are getting worse.のように、仮定法の後に用いられて文頭に置かれると、「(ところが) 実際には」という意味になる。しかし、この文例のように、文(節)の末尾にくと、「今のままでも」という意味。

- (9) a. I thought it was too humiliating for you to have to be seen with such a little drab as I was looking.
- b. [訳例] 私みたいなみすぼらしい女と一緒にのところを見られることは、あなたにしたらずいぶん恥ずかしいことじゃないかと思ったの。
- c. [改訳] あなたが恥ずかしい思いをなさるんじゃないかと思ったの。あたしみたいな、こんなみすぼらしい女と一緒にのところを見られるなんて。
- d. [解説] it was ... for you to ~を、英文解釈流のパターンで訳すと面白くない。as I was lookingは、文字通り訳せば、「私がそう見えているように」であるが、柔軟な発想で訳したい。
- (10) a. The story spread over the ship as stories do, and he had to put up with a good deal of chaff that evening. It was a fine joke that Mr. Know-all had been caught out.
- b. [訳例] 話というものがすぐ伝わるものであるように、この噂もたちまち船中に広まった。そのため彼は、その晩ずいぶん冷やかさに耐えなければならなかった。「何でも御存知氏」がシッポをつかまれたのは、まったく最高のジョークといえた。
- c. [改訳] こういう話というのはすぐ伝わるもので、この噂もたちまち船中に広まり、その晩、彼はさんざん冷やかされる羽目になった。「何でも御存知氏」がシッポを掴まれたのだから、まったくのお笑いぐさだ。
- d. [解説] as stories doは、「話というものが広まるものであるように」ということだが、これでは体をなさない。思い切って、「御多分にもれず、この話も」といった訳も考えられよう。
- (11) a. "We don't need salt here. There's too much as it is. You taste any bit of earth and you'll find it salt."
- b. [訳例] 「ここでは塩は必要でない。この通り、あり余っているのだから。どこでもいいから土をなめてみなさい。それが塩だってことがわかるだろう」
- c. [改訳] 「この土地には塩はいらないよ。それでなくてもありすぎるくらいなんだからね。どこでもいいから地面をなめてごらん。塩だってことがわかるから」
- d. [解説] as it isは、「今そうであるように」が文字通りの意味だが、「今だってもう」「それでなくても」といった発想の転換ができるだろう。

これら(8-11)に関して片岡・金は、

asの意味は、「...のように(態様)」であるが、この訳語をそのまま使うと、後ろから訳し上げる結果になる。できるだけ原文の流れを尊重するためには、この訳語にこだわらず、思い切って発想を変える必要が出てくるだろう。

と記している。ただ、具体的な訳出準則は示していない。

これらの説明は、翻訳を指導する者が訳語決定の手法に関して単なる経験則の集積を結果論と論じているものである。英日に関する翻訳の技法ないし方略は一部の翻訳者から提唱されていて、従来の英文法体系とは異なった観点での体系化が一部図られているものも確かにある(小正 1989、安西 1982、中村 2003 など)。ところがこういった翻訳教育で

は、言葉の意味を正面から理論的に議論することなく、S LをひとまずもってもらいたいT Lに置き換えるための手順や技法のみの指導に終始し、正しい訳例に至るまでのプロセスや適切な訳文選択を自分で導く上での理論的プロセスについては理論に基づいた体系的な考察がなされてこなかった。また、「直訳」「意識」のどちらが正しいかという一般論を振り回すことはあっても、立場や感性、センスの違いからやや水掛け論的な議論に陥ってしまっている面もあるだろう（この点は、翻訳における等価性の問題として議論が多いが、本稿ではこの論点には立ち入らず、むしろS Lの意味処理の中でいかなる意味表象を構成し、それをどのようにT Lで訳語選択するか、という切り口で論じてゆきたい）。

ここで注意したいのが、訳出の可能性は、スコポス理論でも明らかなように、翻訳の目的によって大きく選択の幅が広がることである。Vermeer(2000)に、

The point is that one must know what one is doing, and what the consequences of such action are, e.g. what the effect of a text created in this way will be in the target culture and how much the effect will differ from that of the source text in the source culture

とあるように、一律で何がよい訳出であるかは俄かには決定し難い。しかし、無制限に訳出可能性が広がるのではなく、認知意味論で言う語の「コア」を求心力にすることによって、その意味の射程（弾性）が画定されることから、訳出可能性の拡散は食い止められる。この「コア」から具体的文脈の中で意味合いを適切に把握し、効果的な訳語が適切に選択できる原理を提示するのが、本稿の狙いである。

4. 認知意味論から見た多義語の意味処理のプロセス

そこで理論的な枠組みを提示するに当たって本稿が採用するのは、認知的スタンス(cognitive stance)である。言語は、形態・構造・意味などその様々な側面が、外部世界を解釈する主体の認知プロセス（抽象化・具象化、焦点化、視点の投影・交換、図一地の反転、前景化－後景化など）によって動機付けられており（山梨2000）、本稿はその動機付けを理論的に解明する立場を採るからである。そしてこのスタンスの特徴は、(1)心的意味表象、(2)情報処理、の二つである（ARCLE編集委員会2005）。(1)はS Lを理解するプロセスの中でどのような心的意味表象を立ち上げるか、そして、(2)はその表象をどのような認知的な言語処理によって得るか、に関わる。

また、本稿は多義語の語義確定のメカニズム解明と、それがいかにT Lの訳語決定に反映されるかについて論じるものである。ここで、多義語について定義しておくとして、1つの語に複数の関連した語義が認められる現象を「多義性」と呼び（多義性が認められる語が「多義語」）、複数の語義が存在するとはどういう事態を指すのか、複数語義の関連性をどのように説明するか、という2つが多義語をめぐる中心的な課題である（田中2003）。

そうすると、まずは、(1)心的意味表象の問題として、複数の語義が存在する現象が認知的な立場から見るといかなるものかを説明し、さらに、複数語義の関連性を一貫した理論によって説明した上で、(2)情報処理の問題として、語義確定のプロセスを言語の線條構造

性に即して説明してゆく必要がある(一般に、多義語のdisambiguationの問題とされている)。

多義語と言えば、一般的には、意味が複数あって複雑である、とされているが、認知的視点に立って、その意味的動機付け(同音異義語を除いて、「形が同じなら意味も同じ; 形が違えば意味は違う」という原則—Bolinger's Maxim、Bolinger1977)を見ると、多義語の意味は単純で曖昧であることがわかる。人は一般に、言語を使用して遣り取りを行う中で、常に言葉に対して意味づけを行いながら心的表象として概念を立ち上げる。そして、様々な文脈の中で繰り返し同じ語を経験する中で、概念の一般化を行いながら、概念を形成してゆく(差異化・一般化・典型化作用。詳しくは、深谷・田中1996、田中・深谷1998)。この概念形成の過程の中で、まずは文脈の捨象を行いながら、文脈横断的な(trans-contextual)意味の一般化を行う。これが「意味タイプ」と言われるものである。そして、さらに意味の一般化が進むところまで進んだ結果、コアを獲得する。この「コア」とは、「文脈に依存しない(context-free or context independent)意味」を指す(但し、コアは言語使用者にとって通常は意識されない。詳しくは、田中・佐藤・阿部2006)。そして、実際の言語の使用場面においては、この文脈に依存しないコアが文脈調整を経て、文脈に依存した(context-sensitive)「意味合い」を得る、というのが本稿の主張である(この発想は、Lakoff1987の複数図式論を批判し、Langaker1987のスーパースキーマを語彙習得の観点からより精緻化した考え方であるが、詳しくは田中1997b、ARCLE編集委員会2005を参照)。但し、本来は品詞によって概念形成のあり方が異なるため、コアのあり方も異なるのであるが(田中1997a)、今回は接続詞・前置詞・関係詞などの機能があるasを扱うため、品詞横断的な意味機能を表示するものとしてasのコアを導入する。

また、本稿は「語義」を、操作定義として「辞書的な意味」としているが、これは英和辞典の各語の項の意味として日本語で記載しているものである。これは、文脈化された意味の典型事例を日本語に置き換えたものであって、翻訳の作業で具体的に得られる数限りない「訳語」を全て網羅しているものでは決してない。熟達した翻訳者であれば、翻訳という言語経験を多く経る中で、様々な「訳語」を蓄積しており、辞書に載っている「語義」とこの「訳語」とにギャップがある場合、翻訳の手引書や翻訳指導の現場では、単なる辞書的な「語義」ではなく、ふさわしい「訳語」を選択せよ、と説明するのであるが、実はこれは、SLの処理の中で、「コア」が具体的な事例の中で文脈的調整を経て「意味合い」に至り、それをTLで処理すると適切な「訳語」が得られる、という風に指導しない限り、経験から得られた結果論の押し付けになる恐れがあることが指摘できよう。

次に、(2)情報処理についてであるが、人間の言語および非言語情報の処理は一般に、「符号化」、「貯蔵」、「検索」の3段階から構成されていると考えられており、「符号化」の段階で、入力情報が処理可能な内部形式に変換され、ある一定の操作単位で処理されていることが知られている(門田 2002)。この処理単位を「チャンク」と言い、我々は言語情報を入力した際にこのチャンクごとに心的な意味表象を構成してゆく。このチャンクと意味表象との関係、さらにはチャンク同士の意味表象の関係と情報の統合メカニズムに着目して、SLからTLへ訳出をする際の認知メカニズムを分析する必要がある。

この点、前述の片岡・金(1989)は

asの意味は、「...のように（態様）」であるが、この訳語をそのまま使うと、後ろから訳し上げる結果になる。できるだけ原文の流れを尊重するためには、この訳語にこだわらず、思い切って発想を変える必要が出てくるだろう。

と言っているように、翻訳に当たって「原文の流れを尊重する」ことの重要性を示唆している。これは、一般的には英語と日本語の統語構造が鏡像関係(mirror image)にあり、言語構造が大きく違うという困難な課題（一つの翻訳不可能性）を克服すべきことを示唆しているのではあるが、さしあたり、本稿ではS Lの言語処理による語の意味のあり方を扱っているので、S Lをいかに「原文の流れを尊重」して理解するか、に焦点を絞ることとする。

この点、言語は本質的に線条構造を有している以上、言語の意味理解は順送りに処理される（オンライン処理。なお、チャンクごとの情報の構成□統合モデルについてはKintsch1998）。だとしたら、この多義語のdisambiguationも順送りに処理される。よって、S Lを理解しようと思うと、情報のチャンク化（チャンキング）を施した上で、チャンクごとにどのような意味表象が立ち上がるかを順次検討し、多義語の意味合いがどのように確定してゆくかをみてゆく必要がある。

以上を踏まえて、今度は具体的にasがどのような意味の姿をしているか、検討する。

5. as の意味世界

実際に、翻訳者がasを訳出した「訳語」を無作為に列挙すると、次のようになる（山岡「翻訳から生まれた新世代の英和辞典」を参照している）。

～するたびに、なんて、おなじように、て、前で、でもあるかのように、～然として、変わらない、かぶって、～するなかを、～する間に、とまあ、見てのとおり、～ざま、～に劣らず、具合に、ように、のに、こう、～するなり、同じ、と言って、そのあいだに、どおり、ながら、ざまに、としての立場から言えば、そばから、～と同時に、のように、～しかたに似ている、～のように、えてして、～ところだった、拍子に、～のころ、代わりとして、ひけをとらぬ、うちに、はずみに、そのあと、つれて、態度で、その拍子に、～した瞬間、こと、～（した）ところで、まま、～して、～とともに、ときに、しな、如く、～のなか、折しも、として、～通り、直後に、～するほど、～するうち、～したちょうどそのとき、（～した）せいで、～の、並み、～している前で、おいて、さながら、～するうちに、～の頃、たびに、まさに、～したところ、～ながら、～するにつれ、ころ、からね、並みの、～流に～すれば、例にもれず、～するあいだ、～を勤めながら、が、にも、～だが、～ながらの、～流に、～に似た、～にさも似たりだ、どおりだったから、～する直前、～うちに、～という理由で、とたん、そんなところへ、～し、～ころになって

この無作為な訳語リストからは、何ら訳出準則は得られない。だとすると、語義分類を行

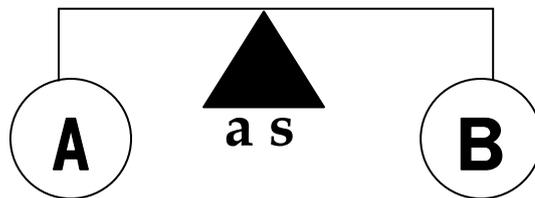
う必要がある。そこで、「コア」「意味タイプ」「訳語」をトップダウン式に示せば、以下のようなになる。これに、文脈とともに英文を示した上で、その翻訳、および出典を明記してクロスレファレンスを図ると、「翻訳英和辞典」の一つのあり方になるだろう。

なお、ここに掲げた「訳語」は、上記の無作為な訳語リストを意味分類し、無用な訳語は削除して編集してある。また、通常の辞書に載っている「語義」よりも訳語が豊富なのは、実際の翻訳事例から収集しているからである。前述の通り、本稿は紙面の制約上、接続詞・関係詞に限定しているが、asのコア自体は他の用法にもすべて共通である。

as 【コア】「ふたつの並べられた物・事が等価の関係にあることを示す」

文脈によって「同時性」「理由」「逆接」「類似性」の意味を表す

(『Eゲイト英和辞典』から引用)



[接] / [代] 《関係代名詞》

【意味タイプ】	【訳語】
①「時」	・～する時に ・～する間に ・～しながら ・～する瞬間 ・～する中を ・～さま(に) ・～するたびに ・～するなり ・その間に ・～するそばから ・～と同時に ・～ところだった ・～拍子に ・～のころ ・～するうちに ・～するはずみに ・そのあと ・～のまま ・～とともに ・～しな ・～のなか ・～する直前に ・折りしも ・直後に ・～ころになって ・～したところ ・～したちょうどその時 ・～の頃 ・～するたびに ・～とたん
②「比例」	・～するにつれて ・～と比例して ・～と並行して ・～するほど
③「態様」	・～するように ・～するやり方で ・～するのと同様に ・～具合に ・～どおり ・～仕方に似ている ・～如く ・～どおりだったから
④「対照・対比」	・～であるが(一方) ・～と違って ・～だけれども ・～のに ・～前で ・こう～ ・～している前で ・～が ・～だが
⑤「理由」	・～なので ・～するので[から] ・～したせいで ・～という理由で
⑥「比較」	・～と同じほど ・～ぐらい ・～のように ・～に劣らず
⑦「等価状態」	・～でもあるかのように ・～然として ・変わらない ・同じ
⑧「単純接続」	・～て...する ・～して ・～し
⑨「等価情報の繰り返しによる強調」	・見ての通り ・この通り～なので

6. 認知意味論による as の訳語選択の指導法

では、asの認知意味論的な考察を踏まえた上で、これまで挙げたasの事例をasのコアに照らしつつ、チャンクごとの「順送り訳」を施した上で、どのようにdisambiguationが行われるか示し、訳出に至るまでの指導法について順送りの発想で示してみよう。

(4) c. Try and see things/ as they are.

d. [順送り訳] 物事をみるようにしなさい、/ありのままの姿で。

e. [things]=as=[they(=things) are] 物事がある状態と等価なものとして⇒「ありのままの姿で」という訳になるだろう。この場合、asの意味合いは、as they areまで処理した段階で確定されるだろう。

(5) c. Why do you have to bother me/ with a thing like that/ when I am busy enough/ as it is?

d. [順送り訳] なぜ私を煩わせなきゃいけないの?/そんなことで。/忙しい時に/この通り。

e. [I am busy enough]=as=[it(=I am busy enough)] is 私が忙しい状態と等価なものとして⇒「現に」「この通り」「ご覧の通り」という訳になるだろう。もっと思い切って「そうでなくても(忙しいのに)」と訳すと、文尾にas it isという内容の等価な繰り返し情報を念押し的に入れたニュアンスがよく伝わる。この場合、asの意味合いは、as it isまで処理した段階で確定されるだろう。情報の文末焦点(付加的新情報に関する無標の情報構造、福地1985)からすると、as it isはI am busy enoughという情報と等価な情報を繰り返しているのので、I am busy enoughを強調している、といえる。しかし、訳出段階では、「この通り、忙しい時に」とか、「そうでなくても、こんなに忙しいのに」という風に、情報提示順に従った訳出をするのは難しい。

(6) c. There is a legend/, quite without foundation/, that I am fond of finding fault with society as it is/, without having anything better to suggest/ in its place.

d. [順送り訳] 伝説があります/まったく根拠もなく/私が世の中の現状についてのあら捜しをするのが好きだという/もっといい提言も何もないまま/代わりになるような。

e. [改訳案] まったく根も葉もない伝説があつて、それは、わたしが世の中の現状について文句ばかり好んで言っているというのです。でも、わたしはちっとも代案は示していない、って言うんです。

f. [society]=as=[it(=society) is] 社会がその現状の姿と等価なものとして⇒「社会の現状」「社会の今のあり方」「世間の有り様」ぐらいの訳になるだろう。この場合も、as it isまで処理した段階でasの意味合いが確定されるだろう。訳出では、「社会の現状」とか「世間のありさま」という風に、asで等価関係に結ばれている情

報を結合して訳した方がいいようだ。

(7) c. She realized/ in a sudden/ that to him/ she was just the same/ as she had ever been./ He had loved her/ always/ as she was.

d. [順送り訳] 彼女は気がついた/突然/あの人にとっては/自分はまったく同じだ、と/昔とかわらず。/ あの人には自分を愛してくれていた/いつも/私のありのままの姿を。

e. [改訳案] 彼女は突然、気づいたのでした。あの人にとって自分は昔と変わらずまったく同じ存在だ、と。あの人にはいつも自分のありのままの姿を愛してくれていたのだ、と。

f. [her]=as=[she was] 彼女と彼女のその時の有り様と等価なものとして⇒「ありのままの姿」「あるがままの私」「等身大の私のまま」「そっくり、そのままの私」などの訳が思いつく。「自分をありのままの姿で (愛してくれていた)」だとasで結ばれた等価情報をバラバラに訳出できるが、あえてその必要はないだろう。「自分のありのままの姿を (愛してくれていた)」でもどちらでもよい。

(8) 上記(4)から(7)と同じなので省略する。

(9) c. I thought/ it was too humiliating for you/ to have to be seen/ with such a little drab/ as I was looking.

d.[順送り訳] 私、思ったの/あなたがずいぶん恥ずかしい思いをなさるんじゃないかって/人に見られてしまって/こんなだらしない女といるところを/それって、私の見た目どおりでしょ。

e. [such a little drab]=as=[I was looking] こんなみすぼらしい女と私の見た目が等価なものとして⇒「見たとおりのこんなみすぼらしい女」ぐらいの訳になるだろう。意味合いの確定時期も上記(4)から(7)と同じ。

(10)(11)は 上記(9)と同じなので省略する。

これらを検討してわかるのは、翻訳者はSLの意味解釈をする際はオンライン処理によって、情報提示順に沿ってasの意味合いの確定をチャンク単位で行い、TLの訳語決定の際は、SLから離れて、適訳を選択し決断していることである。言語は意味処理の単位であるチャンクごとに処理されるので、asが文中にある場合のasのambiguityの解消時期は、as節のチャンクを認知し、意味処理した段階であるといえる。その段階で初めてasの意味合いの確定が行われると考えられる。そして、確定された意味合いを基に、TLにおける文脈から語用論的な調整を経て、適切な訳語が選択されるのである。従って、指導法もコアに照らしつつ、以上に記したプロセスに従って訳出に至る手順を示すことが、翻訳指導のある段階では必要となるだろう。

では、元に戻って、事例(1)と(2)を、asのコアを基に訳出指導を施してみよう。

(1) c. [things were going to be difficult enough] / =as= [it was] とチャンクに分けられ (厳密には as は it was のチャンクの一部)、things were going to be difficult enough 全体を受けた状況が it を指し、それと同じ情報を繰り返しているので、asのコアに照らすと「等価情報の繰り返しによる強調」の意味タイプだとわかる。

そうすると、訳語自体は「ただでさえ」「そうでなくても」「実のところは」など、いかようにでも選択できることになる。そこから先は、TLの文脈の中で日本語としての語用論的調整を行いながら訳語を最終決定することになる。

- (2) c. [Out of the tail of his eye,/ he could see the dab of cotton-wool / on his cheek / wagging absurdly] / =**as**= [he spoke]. とチャンクに分けられ、asのコアに照らすと、as以前の出来事と[he spoke]の出来事が同時に共起しているという意味表示をasが担っていると考えられる。意味合いとしては同時性を表す事態であり、あとはsee the dab of cotton-wool on his cheek waggingとspokeというそれぞれの動詞が同時に起こる場合の接続の仕方をTLである日本語の中で模索してゆけばよいことになる。訳例の「はずみに」という訳語は、heがspokeした状況で同時にthe dab of cotton-woolがwaggingする状況をイメージすれば、選択肢にのぼってくるだろう。ただし、この訳語が唯一絶対的な訳語ではないことは付け加えておく。

紙面の制約上、本稿では主にasの「態様」の意味タイプの事例を扱ったが、訳出プロセスとその指導法は他の意味タイプ（例えば事例(2)）でも同様である。

7. 認知意味論から見た訳出プロセスと訳出準則のあり方

第2章で述べたとおり、語彙レベルの訳出について考える際には、SLの意味表象（事態構成とも言う）を検討することが大切であるが、それに関連して注目したいのが「意味の理論」である(Seleskovitch 1978/1968)。これはもともと通訳理論として提唱されたものではあるが、テキストの恒常的現存性のある翻訳でも、通訳とある程度共通のプロセスがあるので、ここで指摘しておきたい。Seleskovitch & Lederer(1989/1995)は通訳のプロセスを次のように述べている。

1. 言語的意味 linguistic meaning の諸要素を言語外の知識と融合させて、「意味」(sense)を得る。
2. 「意味」が生じると同時にそれを非言語化(deverbalize)し、
3. この「意味」を自発的に言語として表現する。

実は、この理論は意味(sense)（本稿でいう意味表象）の内実を実質的には全く議論をしていないことなどから、正当な批判も多い（水野 1997 など）。しかし、認知意味論からすれば、「非言語化(deverbalization)」という言葉が適切か否かは別にして、プロセスの枠組みはうまく提供しているといえる（この理論を翻訳に応用したものとして、Delisle1988、Bell1991）。

では、この理論のいう「意味(sense)」の内実とはどのようなものか。具体的に言うと、言葉（発話）の意味は、背景知識・世界知・文脈的知識など語と結びついた知識、即ちセレスコビッチの言う認知的補足物(cognitive complements)と相俟って、「発話の意味と発話者の意味の融合態」として意味づけられ、□対象・内容・態度・意図・表情□の総合的把握を通じて理解される。つまり、われわれはSLのテキストの中で線条構造にしたがって順

次、情報に接すると、それが引き金となって、チャンクごとに自分の持っている長期記憶から関連のあるものを呼び起こし、(文字テキストからはそのテキストから浮かび上がってくる) 発話者の態度・意図・表情の把握とそれらが関連しあって記憶の引き込み合いを起こし、頭の中で関連配置されることによって意味を構成する(記憶の関連配置)。従って、われわれはテキストにある情報だけでなく、自分がすでに持っている様々な知識(schema)をフルに動員してSLのテキストを理解してゆく。そして、このプロセスは意味の不確定性(多様性:言葉の意味は人によって意味づけの仕方が異なる、多義性:状況によって意味づけが異なる、履歴変容性:同一人によってもその時々で意味づけが異なる、さらに、不可知性:人には知りえない意味がある、という意味の特性)によって、ダイナミックに絶えず変わることを余儀なくされる。これが認知意味論をさらに進めた、人間の言語に対する意味づけ作用を捉えた「意味構成主義」の立場である(これは意味づけ論の立場で、詳しくは深谷・田中 1996、田中・深谷 1998)。

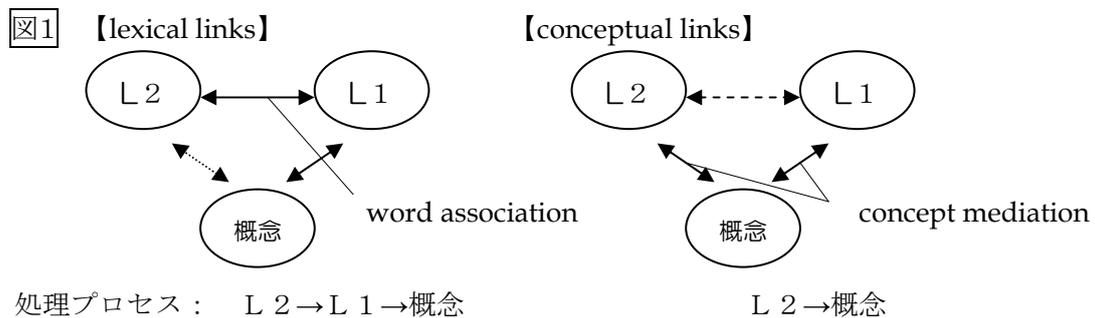
かように、意味表象は具体的な文脈の中でコミュニケーションの瞬間、瞬間においてダイナミックに変化するものとはいえ、語のもつコアは抽象的であいまいな形で一つのスキーマとして長期記憶に存在する。だとしたら、翻訳においてSLを理解するという一つのコミュニケーション行為においてある語を意味処理する際には、その語からトリガーされるコアが呼び起こされ、その他呼び起こされた様々な記憶どうしが連鎖して具体的な文脈の中で意味合いが確定し、それに基づいて、語用論的調整などを経てTLの訳語が決定されると考えられる。

ここで、心理言語学の知見から、bilingual lexicon の議論を導入しておきたい。以下、門田(2003)を引用する。

心理言語学による先行研究によると、一般にはL1(本稿で言うTLとしての日本語)とL2(本稿で言うSLとしての英語)での意味概念表象の共通性が支持されている。つまり、母語・第二言語の語彙項目自体は、別個の独立した記憶システムに入っているが、それらの意味的・概念的表象は、共通の保持・処理システムがある、というものである。語の意味概念レベルでは母語と外国語で共通であることがこれまでも指摘されているが、実際の外国語の単語と意味概念との関係については、語彙的関連づけモデル(word association model)と概念的媒介モデル(concept mediation model)という2つの心的モデルがこれまで提案されてきた(図1参照)。

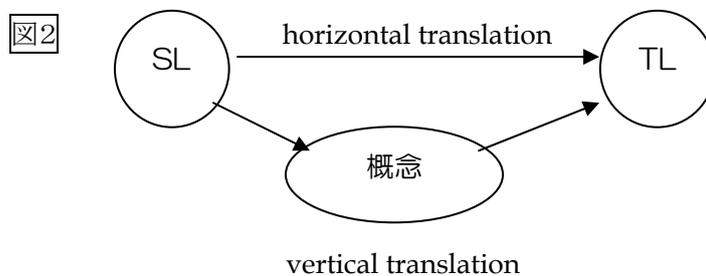
前者の語彙的関連づけモデルでは、外国語の語からその語の意味概念にアクセスするには、まず母語に翻訳し、それをもとにはじめて概念の把握が可能になる。それに対し、後者の概念的媒介モデルでは、母語・外国語のそれぞれの言語は、互いに独立して意味概念に結びついており、母語への翻訳は必要ないと考える。

第二言語の熟達度が増すにつれて、語彙的関連づけモデルから概念的媒介モデルへと徐々に移行するのではないかということが示唆されている。



もう一つここで翻訳プロセスの作業仮説として de Groot (1997)の horizontal translation と vertical translation の 2 つのモデルを導入する。概念定義は以下の通りである。

- horizontal translation とは、“transcoding,” that is, the replacement of SL linguistic structures of various types (words, phrases, clauses) by the corresponding TL
- vertical translation とは、two main processes: full comprehension of the SL text/discourse (henceforth: text), including its pragmatic intention, followed by production of the constructed meaning in TL text



この2つの考察を翻訳の実践と指導という場面に応用して考えてみよう。

まず、第二言語の学習段階では、ある語をめぐってまずは既存の第一言語の参照枠に依拠して search-for-translation-equivalent strategy で word association による意味の習得が行われるが、学習が進む過程で概念形成が進み、コアの獲得が意識的であれ無意識的であれ行われて意味処理が concept mediation の段階へと移行する。この段階に進むと、意味処理はある程度自動化され、ある語を入力すると第一言語の語義ではなく、心的意味として概念を表象するようになる。この時、第一言語は介在させないで第二言語からストレートに意味表象に至り、事態構成ができることになる。

ところが、翻訳を念頭においた学習に切り替えた段階で、第一言語と第二言語との関係性も変容する。日本人が英語を日本語に翻訳する本稿の事例の場合、翻訳の最終の結果は

第二言語が表象する事態を第一言語によって再構成することであるので、第二言語のある語を順次チャンク単位で入力した段階でできるだけスムーズに第一言語による訳語が選択できることが望ましい。だとすると、純粋な第二言語習得とは違う意味処理の学習が行われるものと考えられる。つまり、翻訳訓練を行う際、第二言語の意味処理の段階で本来は **vertical translation** を **concept mediation** によって行うわけであるが、経験を重ねる中で経験則として訳出パターンを蓄積することで訳出プロセスが自動化し、処理負荷の少ない **horizontal translation** が可能となる。この時の **bilingual lexicon** では、ある種の **word association** の処理によって適切な訳語を瞬時に選択することが行われる。このように、通常の S L の意味処理のプロセスと、翻訳における S L の意味処理のプロセスのあり方は、最終産物が異なることに照応して、異なっていると結論づけられよう。

だからといって、翻訳指導をする局面でいきなり **horizontal translation** を目指した経験則の積み重ねの結果のみを提示して教えることは避けたい。それでは学習ストラテジーを身につけ、翻訳の準則を自ら発見し構築してゆくプロセスが省かれてしまうからだ。そうではなく、できるだけ適切な訳出ができるに至るプロセスを明示的に指導してゆくことが大切だろう。そのためにも、訳出の認知プロセスを翻訳を教える側がある程度明示的に認識した上で指導することが望ましいといえる。

8. おわりに

以上、本稿では **as** を例に取り、多義語の意味構造に焦点を当てた上で S L の意味処理のあり方について理論的な考察を行った。翻訳の実践や教育において、S L における多義語を捉える上で本稿が主張する認知処理のメカニズムを意識することの実益は以下のとおりである。

まず、「コア」という理論装置を翻訳の実践や教育の場に導入すると、これまでは辞書を頼りに 1 対多対応で固定的に記憶していた語義では訳語として T L の文脈上不都合が生じていたような場合でも、コアを押さえておけば柔軟な訳出が可能となる。また、コアを想定することで意味の弾性に適切な絞りをかけることができ、誤訳が防止できる。コアにより意味世界が如実に捉えられるため、イメージが湧きやすく意味表象がしやすくなるため、柔軟な訳出が可能となる。さらに、必要に応じて辞書の訳語を逐一探し読みするという従来の方法とは異なり、コアを基に自分で S L からの意味表象（事態構成）ができるようになり、訳語選択も自由にできる状態になるので、訳語選択の自己モニターもコアに遡って瞬時に行うことができる。

今後は、翻訳プロセス論全体の中で S L の意味表象とその T L への訳出、という諸局面との関連の中で訳語選択の問題を的確に位置づけ、訳語選択をめぐる多層的な論点を吟味してゆく必要がある。また、品詞別に多義の構造を詳らかにし、多義派生原理や **disambiguation** のプロセスを品詞別に分析・検討しながら、訳語選択の研究を行う必要もあるだろう。翻訳の認知プロセスと意味表象のあり方を明示的に認識することで、それが翻訳実務や翻訳教育の質の向上につながることを望むものである。

【謝辞】

本稿は、日本通訳学会第3回年次大会（2002年9月）及び日本認知科学会第20回大会（2003年6月）での発表の一部を基に文書化したものである。参加者の皆様の貴重なコメントに対し、感謝の意を表したい。また、通訳翻訳理論に関し水野的教授、認知意味論に関し田中茂範教授、そして翻訳実務に関し山岡洋一氏のアドバイスを賜ったことに対しても併せて感謝の意を表したい。

著者紹介：河原清志（KAWAHARA Kiyoshi）立教大学異文化コミュニケーション研究科博士前期課程在籍。専門は認知意味論・英語教育・通訳翻訳研究。日本通訳学会通訳教育分科会幹事。

参考文献

- ARCLE 編集委員会（編著）田中茂範（編集主幹）（2005）『E C F 幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み』
- 安西徹雄（1982）『翻訳英文法』バベル・プレス
- 安西徹雄（1994）『翻訳英文法徹底マスター』バベル・プレス
- 安西徹雄（監修）片岡しのぶ・金利光（著）（1989）『翻訳英文法方式による英日翻訳トレーニング・マニュアル2』バベル・プレス
- Bell, R. (1991). *Translation and Translating; Theory and Practice*, London: Longman.
- Bolinger, D. (1977). *Meaning and Form*. London: Longman.
- de Groot, A. (1997). The Cognitive Study of Translation and Interpretation – Three Approaches. Danks, J. et al. *Cognitive Processes in Translation and Interpretation* pp.25-56
- Delisle, J. (1988). *Translation: An Interpretive Approach* (Translation Studies 8), Ottawa: University of Ottawa Press.
- 深谷昌弘・田中茂範（1996）『コトバの＜意味づけ論＞』紀伊国屋書店
- 福地肇（1985）『談話の構造』大修館書店
- 門田修平（2002）『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか』くろしお出版
- 門田修平（編著）（2003）『英語のメンタルレキシコン』松柏社
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. New York: Cambridge University Press
- 小正幸造(1989)『すぐれた英語翻訳への道』大修館書店
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I. Stanford: Stanford University Press
- 水野的（1997）「意味の理論」批判と通訳モデル『通訳理論研究』第13号

- 中村保男 (2003) 『英和翻訳の原理・技法』 日外アソシエッツ
- Seleskovitch, D. (1968/1978). *Interpreting for International Conference*, Washington, D. C.: Pen and Booth.
- Seleskovitch, D. and Lederer, M. (1989/1995). *A Systematic Approach to Teaching Interpretation, The Registry of Interpreters for the Deaf.*
- Vermeer, H. J. (2000). *Skopos and Commission in Translational Action*. Lawrence Venuti, *The Translation Studies Reader*
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論—英語動詞の多義の構造』 三友社
- 田中茂範 (1997a) 『基本語彙の多義性 名詞・動詞・形容詞』 ふじさわ言語研究 5
- 田中茂範 (1997b) 空間表現の意味・機能. 田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』(日英語比較選書 6) 1-123 研究社
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『<意味づけ論>の展開』 紀伊国屋書店
- 田中茂範 (2003) 「多義性(polysemy)」 小池生夫 (編集主幹) 『応用言語学事典』 pp.438-439 研究社
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』 大修館書店
- 鶴田知佳子・佐藤芳明・河原清志(2004)「通訳における訳語選択の理論と実際」『通訳研究』No.4, 15-40
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』くろしお出版

参考資料

- ドロシー・L・セイヤーズ (1997) 『殺人は広告する』 (浅羽英子・訳) 創元推理文庫
- フリーマントル (1989) 『暗殺者を愛した女』 (稲葉明雄・訳) 新潮社
- 小西友七・南出康世 (編集主幹) (2001) 『ジーニアス英和辞典』〔第3版〕 大修館書店
- 竹林滋・小島義郎・東信行 (編著) (2001) 『ルミナス英和辞典』 研究社
- 田中茂範・武田修一・川出才紀 (編者) (2003) 『Eゲイト英和辞典』 ベネッセコーポレーション
- 山岡洋一「翻訳から生まれた新世代の英和辞典」 <http://studio1.idd.tamabi.ac.jp/corpus/yourei/index.htm> より情報取得

